

ジェシカ・ブルーダー著（鈴木素子訳）『ノマド～漂流する高齢労働者たち』  
春秋社（2018年）

本書は、アカデミー賞の作品賞を受賞した2020年公開の映画『ノマドランド』の原作となったポルタージュで、アメリカの現代社会が産み出した放浪の民の実態を活写した本である。本書を読む前に映画をみて強く心を揺さぶられ、改めて本書を手にとった。

ノマド（Nomad）は元々は流浪の民、放浪者を意味し、歴史的には狩猟採集民や遊牧民のことを指している。しかし、本書では住居としての家屋を持たず、移動しながら季節労働に従事する車上生活者を指している。

こうした人々は、アメリカではリーマンショック前後の不況で仕事や家、アパートを失って路上に押し出された中産階級であった点が現代的である。自分が放浪の車上生活をするようになるとは夢にも思わなかった人々だ。特に高齢者が多い。

一方、現代のノマドは、生存のための情報交換やノウハウの伝授にとどまらず、セミナー、フリーマーケット、物々交換会、合同食事会、大規模集会など積極的に活動している。

映画のシーンで、かつて非常勤の教師をしていた時の教え子に会い、「先生はホームレスなの」と聞かれ、思わず「違うわ。ハウスレスよ」と答える印象的なシーンがあった。自分の生活を直視していながらも、プライドは捨てられない。

ホームレスもハウスレスも国語辞典的には同じだが、路上生活者であるホームレスに対し、ハウスレスは仕事をして、車やテントなど住まいのある点が違う。

日本でも近年、インターネットの発達を背景にノマド的なライフスタイル、すなわち就労の場所や時間に縛られない「ノマドライフ」が注目されてきた。特に、新型コロナウイルス感染症の急激な広がりを受けて、テレワークやワーケーションといった仕事のスタイルがもてはやされた。

しかし、ノマドの仕事は肉体作業の季節労働が中心で過酷だ。野菜・果実の収穫、キャンプ場管理、そしてアマゾンにおけるクリスマス時期の倉庫作業などである。

それにもかからず著者はノマドの生き方は経済の犠牲者という視点のみでは考えられない、と言う。車上生活に踏み出した理由が経済的困窮だけでなく、自由を求めた生き方、決断だったからだという。すなわち彼らは「無力な犠牲者でもなければ、お気楽な冒険者でもない」。「単なる生存を超えた何かを追い求め」、「行く手には良いことが待っている」と確信し、そして「希望は路上にある」と考えているという。日本でも経済の好不況にかかわらずフリーターを選択する若者は決してなくなる。ノマドは新しいライフスタイルとして定着するのだろうか。

しかし、絶えず移動し続ける不安定で厳しい生活は、精神や健康に及ぼす影響は大きい。「車を停める場所こそ、アメリカ最後の自由の土地だ」とノマドは考えているという著者の認識は、新しいライフスタイルへの思い込みが強すぎると思うのだが。

筆者はかつてイラン、アフガニスタンで遊牧民（Nomad Tribe）と起居を共にしたり、キャラバンに同行したことがある。携行できる最低限の家財道具しか保有せず、都市住民と比べ物質的生活は見劣りしていたが、彼らから生活への不満を感じることはなかったし、お金や物品の提供を要求されたこともなかった。それは生まれながらの遊牧民であり、また遊牧民として生きていく覚悟があるからだ。

長時間労働の是正やテレワークの実現などといった小手先の「働き方改革」ではなく、“生き方の転換”モデルとしてノマドたちの将来に注目したい。（西村 博史）